元　旦

新らしき年の第一日はやう〳〵に明けゆく。それよ、年ごとの今日の曉になし來し一つの事をなさばや。人の起出ぬ程にとくなさばやと、ふしどいでて机に向ふ。殘るともし火ねぶたげにまたゝくは、夜一夜を照らして早つかれたるにかあらむ。

手箱の底より遺言書とりいでぬ。こはいつの年かの元旦に少し思ふ事ありて志るし始めしが、年ごとにかき改むるを例とは しつるなり。墨すり流しつゝ思ふ。いたづらに又かき改むる時にあひしは、幸なるか幸ならぬか。今きたらむとする今年よ。今年の我身よ。あはれいかさまにてかあらむと思ふに、過ぎ去りにしうき事つらき事つゞき〳〵て吾目の前にあらはれつ。げにも此世はまはり燈籠のやうに、幾たび月日めぐるとも、同じ事くりかへすのみなるを、新らしき年の、何か新らしき事をもてくるやうに思へりしは、あやまりなりき、など思ひつゝ筆をとる。

あはれなる文字、二三字書き四五文字書きもてゆく程に、最もあはれに最も悲しき文字は來りぬ。こはいま〳〵しく恐ろしき文字よと思ふ人もやあらむ。其恐ろしき文字のなかば書かれし折、筆の先俄かにぬけて、紙の上にころがりおちたる樣、さながら戰場にて倒れたる兵士の死顔など見る心地して、氣味わろさいはん方なく、且は誰やらむ我手をおさへて、再び書くな、かゝる文字は、と引きとゞむ

るやうなれば、新らしき筆とりいでむ勇氣もあらぬに、今年の遺言書は、なかばかきさしたるまゝにさしおく。

【入力者注】
底本に行をあわせるために、半角スペースを挿入したり句読点のフォントサイズを小さくした個所があります。

底本：佐々木信綱編「竹柏園集第弐編」
明治三十五(1902)年五月廿七日発行
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年四月二十八日
改訂：令和四(2022)年九月十三日

橘糸重【散文作品集】に戻る。